

いきいき社会活動チェック表

利用の手引き



編集：大野良之

高齢者の社会活動評価法に関する研究班

はじめに

わが国で人口の高齢化が指摘されてからすでに久しい。

人口の高齢化は易罹病性の高い人口の増加を意味しているので、将来的に暗い面が特に強調されることとなります。しかし、人口の高齢化は、一方で、身体的にも精神的にも健全な高齢者の人口が増加することも意味しています。健全な高齢者は時間的ゆとりとともに社会的経験も豊富であるので、その増加によって社会経済文化的エネルギーが潜在的に極めて高くなっていくことも示しております。したがって、高齢者が社会的に孤立することなく、その潜在的な社会経済文化的エネルギーを十分に発揮できる環境の整備が、易罹病性に対するさまざまな保健医療福祉対策とともに、極めて重要なことと考えます。

しかしながら、ここ十数年の我が国における状況をみると、高齢者社会における保健医療福祉対策のあるべき姿とその整備に払われた注目度と努力にくらべると、高齢者の社会的活動（社会参加）に対しては、生きがいという漠然とした形での注目を除けば、具体的にほとんど注目されてこなかったといえましょう。

我々は、平成4年度から厚生省・長寿科学総合研究事業の一環として、高齢者の社会活動とその評価方法に関して6年間にわたって研究する機会を与えられました。

前3年間には、高齢者における社会活動とは何か、高齢者にならても社会的に活発に活動できるためには青壮年期にどのような生活をすべきか、どのような条件整備が必要か、などを中心に研究を進めてきました。後3年間には、社会活動の活発さを高齢者個人のレベルのみならず、集団（地域社会）のレベルでも測定できる方法を開発することを中心に研究を進めてきました。

本冊子は、我々の研究成果の一部を地域で高齢者の保健医療福祉対策を担当している方々（医師・看護婦・保健婦・医療従事者・事務担当者、高齢者事業ボランティアなど）に広く知っていただくためのみならず、さらには、高齢者自身が自分の社会活動程度を自己判定し、自己の社会活動程度を高める契機となることを願って作成したものです。

本冊子の第一部は、いきいき社会活動チェック表の意味と活用方法を中心に、第二部は社会活動の考え方と社会活動の個人指標の開発と方法論的検討などを中心にまとめてあります。つまり、第一部は実践のための使い方、第二部はその理論的裏付けという構成です。

地域で高齢者健診を実施するとき、老人クラブの会合のとき、あるいは特定地域で高齢者（の身体的・精神的・社会的健康度の）実態調査を実施するときなどに、本冊子を使用していただきたいと思います。高齢者各個人が自分の社会活動のいきいき度を判定し、ますます社会活動を活発にして生きがいのある個人生活を実現するために、さらには、地域社会で高齢者の活発な社会活動を可能にするための環境と条件を整備し、充実を図る際に必要な資料を得るために活用していただきたいと思います。

「いきいき社会活動チェック表」が高齢者の皆様にとってさまざまな形でお役に立つことを心から願っております。

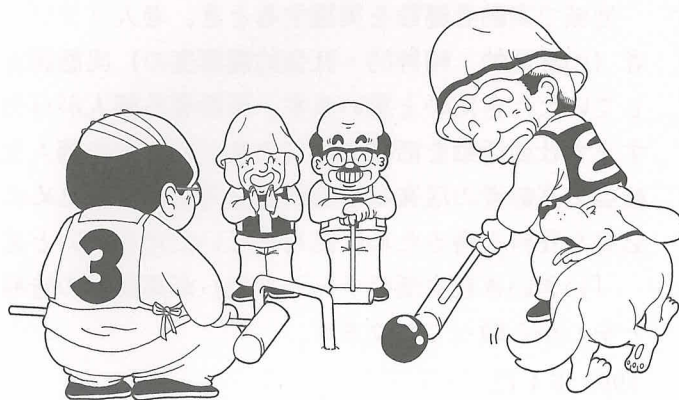
1998年1月

高齢者の社会活動評価法に関する研究班

班長 大野良之

執筆担当者

- 青木利恵 (名古屋大学医学部 予防医学教室)
五十里明 (愛知県衛生部 環境衛生課)
尾島俊之 (自治医科大学 公衆衛生学教室)
大野良之 (名古屋大学医学部 予防医学教室)
川上憲人 (岐阜大学医学部 公衆衛生学教室)
柴崎智美 (埼玉医科大学 公衆衛生学教室)
玉腰暁子 (名古屋大学医学部 予防医学教室)
永井正規 (埼玉医科大学 公衆衛生学教室)
橋本修二 (東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻)



目次

はじめに	1
第一部 いきいき社会活動チェック表の使い方	5
第1章 いきいき社会活動チェック表	7
1. いきいき社会活動チェック表とは	
2. 記入方法	
3. 判定方法	
第2章 いきいき社会活動チェック表の活用	11
1. 対象	
2. 実施方法	
3. 指標の活用	
4. 実施上の注意	
5. 活用事例	
第二部 いきいき社会活動チェック表の理論的根拠	15
第3章 高齢者の社会活動の重要性とその考え方	17
1. 社会活動の重要性	
2. 社会活動の定義	
第4章 高齢者の社会活動の指標	21
1. 調査の概要	
2. 指標の作成	
3. 指標の吟味	
4. 関連要因の検討	
おわりに	33
添付資料	
1. いきいき社会活動チェック表（男性用・女性用）	
2. 社会活動に関する資料	

第1章

いきいき社会活動チェック表

1. いきいき社会活動チェック表とは

1.1 高齢者の社会活動対策の意義

高齢者というと、要介護老人を連想しがちですが、実際には高齢者の多くは身体的障害もなく健康で、社会の一員として種々の社会活動を行っています。

社会活動に関する事業は、保健、福祉、社会教育などの境界領域に位置しています。そのため、特に保健分野からの取り組みは十分なものではありませんでした。

近年の保健活動の流れとして、健康づくりの重要性が認識されるようになってきましたが、現実には運動指導や栄養指導のみで終わっている場合も多いようです。健康づくりの究極の目的は、住民の Quality of Life の向上、言い換えると生き生きとした毎日を暮らすことであると言えるでしょう。実際の研究結果としても、近隣者との社会活動が活発な人の方が、自分が幸福であると感じている人が多いことなどが報告されています。つまり、社会活動は健康づくりのために重要な構成要素であると考えられます。

一方、寝たきりや痴呆対策も、最近の保健活動の重点課題ですが、ケアのみではなく、予防対策も重要です。社会活動水準の高い高齢者ほど、10年後のADLスコアの低下割合が低いという研究結果もあります。

社会活動対策において、福祉や教育との連携をしつつ、より主体的な保健分野の取り組みが必要でしょう。保健活動の現場で、社会活動対策を積極的に行うためには、社会活動を評価するための現場で使いやすい道具が必要となります。そこで、私たちは住民にとっても、また保健現場のスタッフにとっても、簡便でわかりやすい評価方法を開発しようと考えました。それが、この「いきいき社会活動チェック表」です。

1.2 いきいき社会活動チェック表の目的

この「いきいき社会活動チェック表」の目的は、次の3つです。

a. 社会活動の動機づけに

この判定表は、高齢者の良い面を見つけだして、社会活動が活発な人を積極的に評価することができるという特徴があります。活発であると判定された人は、従来の健診で「異常なし」と判定されること以上にうれしく、日頃の活動のはげみになると考えられます。また、住民が、自分で判定を行うことにより、あと何点上がれば、判定がさらに良くなるかが一目瞭然です。

b. 閉じこもり老人の発見

社会交流を絶った老人、いわゆる「閉じこもり症候群」は、寝たきりや痴呆になるという説があります。社会活動が極端に低下した高齢者を把握し、積極的な社会参加に誘い出す努力が必要と考えられます。

そこで、例えば市町村が実施する健康診査においては、身体的チェックだけでなく、社会活動面のチェックも行えば、早期に対応することができます。特に、個人活動において、

「非常に不活発」と判定された人には注意が必要でしょう。ただし、社会活動が低下している人では、健康診査を受診しない人が多いと考えられます。未受診者をきちんと把握し、地区組織の協力や、郵送法との組み合わせにより、要注意者を掘り起こす努力も重要でしょう。

c. 地域特性の評価

この社会活動チェックは、基本的に個人の評価を行うことが当初の目的でした。しかし、この社会活動チェックをいくつかの地域の住民を対象に広く実施して、相互に比較することにより、集団の評価、地域の評価としても利用することも可能です。

1.3 いきいき社会活動チェック表の作成方法

いきいき社会活動チェック表の判定基準の作成方法などの理論的な詳細については、第二部で詳しく述べますが、ここでは概要について説明します。

このチェック表は、個々の社会活動について行っているかどうかの質問に答える「質問表」の部分と、その結果をもとに判定を行う「判定表」からなっています。

なお、当初の質問表では、「時々」しているか、「いつも」しているかを区別して聞いていましたが、最終的にはそれらを区別せずに簡略化しても、判定結果の意義に大差がないと判断し、「している」か「していない」かの2段階で記入するようにしました。

また当初の判定方法としては、その点数をとる人は、同性同年代の中で、上から何パーセントに相当するかを求めたスコアとして相対評価により判定して、数字で表現するように作成されました。このように単に数字で示された場合に、判定結果をもらった住民の気持ちとしては、スコア100を目指そうと思うでしょう。また何も行っていなければスコア0になると考えるでしょう。しかし、性・年齢・項目によっては、いくら活発に社会活動を行ってもスコア100に近づけず、またその項目について全く行っていなくても、かなり良いスコアを示すこともあるなどの特徴を持っていました。すなわち、社会活動を何項目行っているかという絶対評価の方が、感覚的に納得しやすいという側面もあります。

相対評価と絶対評価を同時に理解することができるような表現方法が好ましいと考えられました。そこで、厚生省の作成している「肥満とやせの判定表」において、判定区分によって色分けしている表現方法を参考にして、このチェック表の判定表部分が作られました。すなわち、社会活動を何項目行っているかの点数によって、絶対評価が行われ、判定の色分けによって相対評価が行われるという形で表現することとしました。

なお、判定区分はその年齢階級の人の平均パーセンタイル値スコアによって次のように5段階に分けて、色分けして表現してあります。

非常に不活発：	< 5 %
やや不活発：	5 % ≤ ~ < 25 %
ふつう：	25 % ≤ ~ ≤ 75 %
やや活発：	75 % < ~ ≤ 95 %
非常に活発：	95 % <

もともとの判定基準は、5歳階級毎に計算されていましたが、判定表の図で表現する場合には、1歳毎の方がわかりやすいであろうと考えられました。そこで、当初計算されたスコアは5歳階級の中央の年齢でそうであると見なして、比例計算によって各年齢のスコアを求めました。なお、図に表す場合には、縦線と横線の交わる各点がどの判定区分に入るかだけが重要ですので、間の線の引き方は、見やすさでアレンジしています。

2. 記入方法

基本的に、対象者自身で記入していただきます。しかし、まれにですが、対象者の人がわかりにくいようであれば、保健婦などのスタッフが記入を手伝うことも必要になります。

「いきいき社会活動チェック表」には、青い紙の男性用と、赤い紙の女性用の2種類があります。記入する人は、男性用か女性用かを選んで、用紙を使用します。

まず、チェック表の左側の欄の各質問に対して、「時々またはいつもしている：1」もしくは「していない：0」のどちらかを選択して、○をつけていきます。

次に、「個人活動」「社会参加・奉仕活動」「学習活動」「仕事」の4つの側面毎に、○のついている点数を合計します。すなわち、「時々またはいつもしている」項目数を数えれば良いことになります。

<記入例>

社会参加・奉仕活動

日常の活動	時々またはいつも している	していない
地域行事（お祭り・盆踊りなど）への参加	①	0
町内会や自治会活動	1	①
老人会（老人クラブ）活動	①	0
趣味の会など仲間うちの活動	1	①
奉仕（ボランティア）活動	①	0
特技や経験を他人に伝える活動	1	①

社会参加・奉仕活動 合計 **3** 点

3. 判定方法

チェック表の右側の図を使って判定をします。

まず、自分の年齢のところに○印をつけて、4つの図ともに、自分の年齢にそって、縦の線をなぞります。

次に、4つの側面ごとに、自分の合計点数のところに○をつけて、横の線をなぞります。

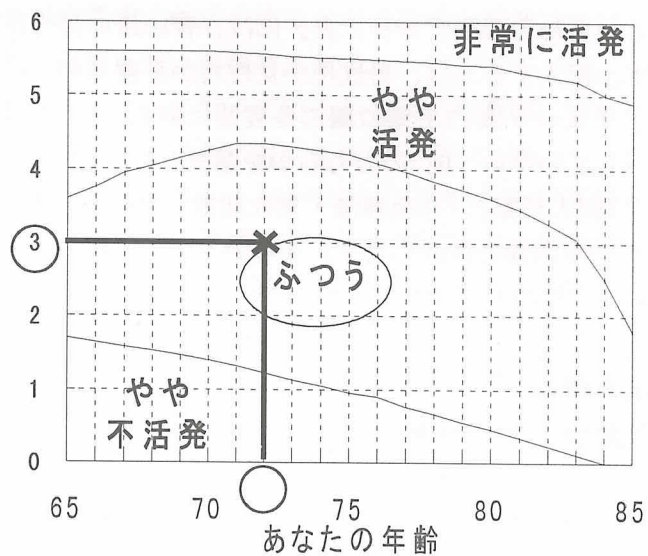
この、縦の線と横の線の交わった点が、その人の判定です。

<記入例>

72歳男性

合計点数3点

判定結果：ふつう



第2章

いきいき社会活動チェック表の活用

1. 対象

65歳以上で日常生活動作がある程度自立し、健康面でも日常生活が制限されることがない高齢者が対象となります。特に、健康面では問題がないが、家庭に閉じこもりがちな高齢者に対して社会活動を活発にさせることを目的として実施して下さい。

日常生活動作がある程度自立していると判断する目安としては、「家の中ではほぼ不自由なく動き回ることができ、となり近所なら一人で外出することができる」程度です。

2. 実施方法

個人に配布し自己チェックを目的として実施する方法と、集団を対象に実施する方法の2通りの実施方法があります。

2.1 個人に対する実施方法

社会活動に関する資料（添付資料2参照）や、自治体の高齢者福祉サービスについてのパンフレット等と一緒に、男女別に作成されたいきいき社会活動チェック表を手渡し、自己チェックを勧めます。個人が持ち帰り、自己の社会活動チェックの目的で利用することになり、チェック後のフォローは特別行わないこととなります。

2.2 集団に対する実施方法

福祉・保健両面の場合を利用し、社会活動に関する資料（添付資料2参照）や、自治体の高齢者福祉サービスについてのパンフレット等と一緒に、男女別に作成されたいきいき社会活動チェック表を手渡し、その場で記入して貰い、結果についての説明等を行います。この際、社会活動について説明する資料（添付資料2）などを会場に掲示すると良いでしょう。

3. 指標の活用

実施の場としては、福祉・保健両面での活用が可能です。

福祉面では、老人会や老人福祉センターの利用者、もしくは福祉の相談の利用者、独居老人等を対象に、自治体の福祉サービスの紹介をかねてこの指標を活用する事が可能です。また、教育効果をねらって、老人学級、老人大学等で、社会活動に関する説明を行い、自己チェックをするという利用方法も可能です。

保健面では、老人保健事業の健康教育、健康相談、健康診查をはじめとして市町村の保健センターで実施される高齢者を対象とした保健事業の際に、健康面での注意の他に社会活動も勧めていくという事が可能です。

また、65歳未満の人に対しても、あなたが65歳になったとき、どのような活動をするのが良いのかといったような参考資料とすることができます。特に、都市部のサラリーマンの方で、60歳で定年された方が、次にどのような生きがいを見つけるかといった場合に活用することができます。

4. 実施上の注意

日常老眼鏡を使用している高齢者の場合は、参加に際しては老眼鏡を持参するように勧めてください。社会活動の項目のチェックは、高齢者一人でも老眼鏡等があれば、実施可能ですが、判定表の記入に関しては、介助が必要となる場合があります。自己チェックの場合には、家庭で同居する肉親に介助して貰うように勧めればよいでしょう。保健、福祉の場では、担当者が記入の介助をすることになります。

高齢者は、細かい文字や、興味のない文章はあまりよく読まないもので、とまどっている方には、是非声を出して読んであげてください。それだけでも、社会活動への興味が沸いてくるものです。

実際に記入の際に対象者から質問があったときは、次の目安で答えてください。その自治体によって、事業の具体的な内容も異なってくるため、実際に行われている事業名に置き換えて説明されるとわかりやすいと思います。

	活動内容	判定の目安
個人活動	デパートでの買い物	デパートとスーパーの区別に関しては、市区町村外や、電車やバスを利用して行く場合はスーパーでもデパートでの買い物と考えて下さい。
	近くまたは遠方の友人・友達・親戚を訪問	市区町村外や、電車やバスを利用して行く場合は「遠方の」と考えて下さい。
	国内旅行	時々の根拠としては1年に1回行っているかどうかとします。
	外国旅行	時々の根拠としては5年に1回行っているかどうかとします。
	お寺まいり	キリスト教等の教会も含みます。
	スポーツや運動	散歩、ラジオ体操、テレビ体操などは、該当します。
	レクリエーション活動	レクリエーションとは、映画を観に行く、海や山などへ出かけるなど、個人的な楽しみの活動などをさします。
	地域行事への参加	お祭りを見に行ったぐらいであっても、他人と出会う行事への参加という意味で該当すると考えて下さい。
社会	趣味の会など仲間内の活動	仲間何人かではじめた〇〇活動（ヨガ、フォークダンス等）も該当します。

参加・奉仕活動	奉仕（ボランティア）活動 カルチャーセンターでの学習活動	道の草取りなどでも、人との共有物の奉仕であれば該当すると考えて下さい。また他人の介護はボランティアですが、肉親の介護の場合は、デイケア、患者会等と一緒に参加するなどの他人との接触がある場合にはボランティアに含めても良いこととなります。 老人学級老人大学や、市区町村が実施するような市民講座等以外で、NHK や民間企業（デパート、新聞社など）などが実施する有料の学習や教育活動のことです。
学習活動	市民講座・各種研修会・講演会への参加 シルバー人材（能力活用）活動	公民館講座も該当します。 ここでいうシルバー人材センターは、高齢者の能力を活用するための学習や教育活動のことをさします。収入を得ることを目的としたものではありません。

5. 活用事例

これまでにいきいき社会活動チェック表を実際に4地域で活用し、実施した住民の方々の意見をうかがいました。市町村が実施する人間ドックや、健康相談、老人基本健診の場で、65歳以上の高齢者を対象として社会活動チェック表の記入を呼びかけ、4地域合計で293人（男137、女155、不明1）が、社会活動チェック表を受け取り、記入に関する調査に参加しました。参加者の社会活動指標の平均値や、記入に関する調査の回答状況は、地域ごとに異なっていましたが、全体では下表のような結果が得られました。

表2-1 調査票回答状況

	回答数	(%)
点数のつけ方はわかりやすかったですか？		
1. わかりやすい	265	90.4%
2. わかりにくい	15	5.1%
3. どちらとも言えない	8	2.7%
無回答	5	1.7%
判定表の記入の仕方はわかりやすかったですか？		
1. わかりやすい	225	76.8%
2. わかりにくい	43	14.7%
3. どちらとも言えない	17	5.8%
無回答	8	2.7%
記入は一人で出来ましたか		
1. 全部一人で出来た	218	74.4%
2. ほとんど一人で出来たが少し手伝ってもらった	51	17.4%
3. ほとんど手伝ってもらった	17	5.8%
無回答	7	2.4%
自分自身の判定結果について理解できましたか？		
1. 理解できた	255	87.0%
2. 理解できなかった	11	3.8%
3. どちらとも言えない	18	6.1%
無回答	9	3.1%
新しく社会活動を始めようと思いましたか？		
1. 思う	73	24.9%
2. 思わない	126	43.0%
3. どちらとも言えない	73	24.9%
無回答	21	7.2%

点数の数え方は比較的容易ですが、それに対して判定表の記入はやや難しく、4 地域合計で 25.6 %（地域別には 47.6 ~ 16.2 %）で介助が必要でした。判定結果については 87 %が理解できたと回答していました。

実際にやってみて、新しく社会活動を始めようと思った人の割合は、実施者の 14.3%から 37.7%におよんでおり、始めようと思う活動としては、体を動かすこと、ボランティア、趣味を通じたこと、老人会活動、自治会活動などがあげられました。また、自分のことがよくわかった、楽しかったという前向きな意見がある反面、新しく社会活動を始めようと思わないと回答した理由としては、今の活動で十分である、体力的に難しい、家族の介護をしているので、仕事をしているので難しい、まだ若いと思うのでもっと年をとったら、という意見があり、実施時に担当者が、社会活動をすることによってどのような良いことがあるのかという説明をするかしないかで、実施後に得られる効果が異なってくる可能性があります。

1. 社会活動の重要性

わが国では、人口の高齢化が急速に進行しており、65歳以上の人口の占める割合は2025年に総人口の約1/4に達すると推計されている。したがって、以前にも増して高齢者に関する問題は注目を浴びるようになってきている。特に、高齢者の増加は、易罹病性の高い人口の増加を意味することから、現在までこの点に注目し、長寿イコール延命という観点から保健医療面でさまざまな努力が行なわれ、医療福祉面を中心とした対策が検討されてきている。

しかし、最近はまだ長生きするだけでなく、長寿の質、すなわち健康長寿が重要であるといわれている。すなわち、身体的に健康であるのはもちろんのこと、精神的・社会的にもよい状態で生活することが大きく注目されている。身体的側面からの長寿要因に関しては現在までに国内外でいろいろ研究報告がなされており、また精神面についても近年注目され、盛んに研究されている。高齢者の社会活動・社会参加に関する研究についても、身体的健康や生きがいと結びつけて論じられ、健康・幸福感との関連に関する研究報告がなされている。そして多くの研究において、社会活動が活発であると、日常生活動作能力(ADL)が保たれ、死亡しにくく、また幸福であることなどが報告されている。したがって、活発な社会活動・社会参加は身体面・精神面において重大な影響を及ぼすと考えられる。

近年のわが国における人口の高齢化は、前述のような易罹病性の高い人口の増加を意味するだけでなく、健康で時間的にゆとりのある経験豊富な人口の増加も意味している。また、既存の統計資料に基づく高齢者の社会・生活活動状況に関する我々の検討¹⁾において、日本の高齢者の多くは日常生活能力は保たれているにもかかわらず、その三次活動(生理的に必要な活動、社会生活を行なう上で義務的な性格の強い活動を除いた活動)の主なものとしてはテレビや休養という活動性の低いものであるという結果が得られている。これは、以前は高齢者は社会の一線から退いた身であり、一般的に社会参加・社会活動は不要のものと考える傾向にあったため、高齢者が社会活動を実施するための基盤ができておらず、もし活動を希望する高齢者がいたとしても、活動の場がないことなどが関連していると思われる。また、高齢者自身にも、ある程度の年齢以上になれば、社会へ積極的に出ていくような生活は慎み、いわゆる隠居生活を送るものだという意識をもっているものが多くいたことも関係していると思われる。

しかし、近年、退職後や子育てが終わって自分自身の時間が多く持てるようになったとき、体力的にあまり衰えておらず、何らかの活動を十分できるにもかかわらず、何をしたいのかわからず、生きがいを探している高齢者が少なくない。つまり、身体面での長寿という点ではかなりの程度まで実現しつつあるわが国においては、今後、高齢者の生活の質(QOL)向上がより重要な課題となるのである。その中でも特に社会活動・社会参加は、生きがいという面だけでなく、独居老人や高齢者世帯が増加しているというわが国の現状では、特に、社会とのつながりを保つという観点からも重要であると考えられる。ま

た、このような健康で時間的にゆとりのある経験豊富な高齢者の社会経済文化的エネルギーを有効に活用すれば、社会の活性化につながる可能性が大きいと考えられる。

したがって、今後、高齢者の社会活動は以前にも増して重要になるとともに、活動を希望する高齢者のニーズに答えることのできるような環境面での整備等を進めていかななくてはならない。そのためには、まず、各個人の社会活動程度を測定することにより、その現状を把握することは必要不可欠である。そこで、我々は、高齢者の社会活動・社会参加に注目し、その程度を個人レベルで客観的に測定することを目的として、本指標を開発したのである。これにより、各個人の社会活動状況が明らかになるとともに、地域集団全体の活動状況も把握することが可能となり、社会活動推進のための具体的方策の基礎的資料を提供できると考えられる。また、高齢者個人が自らの社会活動程度を自ら評価するという形式であるので、自分自身の現在の活動状況を認識することにより、社会活動に対する意識を高め、現在行っている社会活動の継続や新たな活動の開始の契機となることも期待される。

2. 社会活動の定義

社会活動とは何か、という点については、地域、時代、各個人の置かれている状況などによりさまざまな考え方があり得ると思われる。すなわち各個人により、社会活動という言葉の指し示すものは異なっていると考えられる。社会活動程度を測定するに当たって、各人がばらばらのイメージを持っている活動を漠然と評価したのでは、結果が出たとしても、その結果の解釈に関して、各個人間で、ずれが生じてくる。そうすると、高齢者の社会活動についての意識を高めることができず、社会活動促進にうまくつながらない可能性がある。そこで、社会活動を測定する際には、社会活動とは何を指すのか、今回の指標ではどのような活動を測定しているのかを明確にしておく必要がある。

我々は、社会活動についての定義を検討するための予備調査として、1992年に全国の3261市町村の高齢化対策室を対象として「社会活動に関する実態調査の実施状況」に関する調査²⁾を実施し、2249市町村から回答を得た(回収率69.0%)。その結果、各市町村において高齢者の社会活動として過去に

表3-1 各市町村が、過去に高齢者に関する実態調査で高齢者の社会活動として調査した項目

項目	回答数	(%)
老人クラブへの参加	1064	73.6
就労状況	870	60.2
ボランティア	819	56.7
近所づき合い	762	52.7
趣味グループでの活動	744	51.5
町内会活動	674	46.6
高齢者学級	537	37.2
スポーツクラブ	516	35.7
その他各種学習活動	446	30.9
旅行	380	26.3
レクリエーションクラブ	364	25.2
買い物	307	21.2
家事労働	263	18.2
宗教活動	242	16.7
調査あり	1445	100.0
全体	2449	

調査された項目は、多い順に、老人クラブへの参加、就労状況、ボランティアなど奉仕活動、近所づきあい、趣味グループでの活動、町内会活動、高齢者学校参加、高齢者スポーツクラブ参加、各種学習活動、旅行であった（表3-1）。その他注目される社会活動項目としては、買い物、政治活動、交友関係、交通手段などがあつた。

また高齢者が社会的に活動的であると各市町村の高齢化対策担当者が考える社会活動状況は、多い順に、ボランティア等福祉活動への参加、老人クラブ参加、スポーツ活動、就労している、健康である、趣味グループでの活動、各種行事などに積極的に参加している、生きがいをもち生活している、などであつた（表3-2）。また頻度は高くないが注目される社会活動状況には、各種伝承活動や世代間交流、地域社会でリーダーシップをとるなどがあつた。これらの回答を参考として、社会活動の定義について議論した結果、

表3-2 各市町村の高齢化対策担当者が、高齢者が社会的に活動的であると考える項目

項目	回答数	(%)
ボランティア、奉仕	399	17.7
老人クラブ	332	14.8
スポーツ	216	9.6
就労、仕事	199	8.8
趣味	186	8.3
健康状態	184	8.2
積極的	173	7.7
生きがい	144	6.4
町内会	115	5.1
各種学習活動、文化活動	98	4.4
高齢者大学	70	3.1
環境美化、清掃	70	3.1
収入、経済状態	59	2.6
レクリエーション	59	2.4
世代間交流	48	2.1
伝承活動	45	2.0
計	2449	100.0

我々は、社会活動を、「社会と接触する活動、家庭外での対人活動」と定義することとした。この際の対人活動とは、他人との直接的な接触を意味する。したがって、本や新聞を読む・テレビを見るといった活動は、社会の状況に触れることはできるが、その多くは家庭内における社会との一方的な接触であり、他人と直接接することなく行う活動であるので、社会活動には含めないこととする。また、家事は、ひとつの生活活動ではあるが、買い物を除くと他の人と接触する機会はほとんどないので、買い物以外は社会活動とはみなさないこととする。

このように社会活動を広い意味で規定したのは、高齢者の社会活動を広く捉えるためであり、予備調査の結果からみても、狭く規定するのは妥当でないと考えられる。しかし、社会活動といっても、活動により、実施目的、実施形態、実施内容、影響する因子などが異なる。すなわち、社会活動はいろいろな側面をもっていると考えられる。そこで、我々は、社会活動を次の4つの側面から捉えることとした（表3-3）。

表 3-3 社会活動の 4 側面とその項目

側面	項目数	項目
仕事	1	①仕事
社会参加 ・奉仕活動	6	①地域行事 ②町内会活動 ③老人会活動 ④趣味の会の活動 ⑤奉仕活動 ⑥特技などの伝承活動
学習活動	4	①老人学級 ②カルチャーセンター ③市民講座 ④シルバー人材センター
個人活動	10	①近所づきあい ②近所での買い物 ③デパート ④近くの友人訪問 ⑤遠くの友人訪問 ⑥国内旅行 ⑦海外旅行 ⑧お寺参り ⑨スポーツ ⑩レクリエーション

現在まで、社会活動をこのように明確に定義し、社会活動そのものに焦点をあてた研究は極めて少ない。我々は、以前より、上記のような定義に基づき、高齢者の社会活動の実態の把握や規定要因の解明などを行ってきた。その結果、高齢者の社会活動は4側面から別々に検討³⁾すると、必ずしも年齢とともにすべての活動が減少するものではないこと、社会活動を保つには ADL が保たれていることが必要であることなどが判明した。また、地域別比較観察により、地域により、各側面の活動程度が異なることが明らかとなった。このことから、高齢者が社会的に積極的に活動できるような支援体制を構築する際には、年齢、地域性、今まで生きてきた環境など、多くの要素を考慮する必要があることが考えられる。また、高齢期の社会活動程度と過去の生活習慣や身体状況との関連を検討⁴⁾した結果、青壮年期から、健康を保ち、趣味・運動を積極的に行い、多種類の食物をよく食べることが社会活動の活発さにつながる事が明らかとなった。これは青壮年期からの健診と健康管理および生活習慣の改善が高齢期の社会活動の活発さの規定要因として重要であることを示すと考えられる。

文献

- 1) 橋本修二, 福富和夫, 大野良之: 高齢者の社会・生活活動状況の把握—既存統計に基づく検討—, 厚生学, 41: 5: 27-31, 1994.
- 2) 玉腰暁子, 大野良之, 清水弘之他: 全国市町村における高齢者の社会活動に関する実態調査の実施状況, 公衆衛生, 58: 10: 738-742, 1994.
- 3) 玉腰暁子, 青木利恵, 大野良之他: 高齢者の社会活動に関する実態調査の実施状況, 日本公衆衛生雑誌, 42: 10: 888-896, 1995.
- 4) R. Aoki, Y. Ohno, A. Tamakoshi, et al: Lifestyle determinants for social activity levels among the Japanese elderly, Arch. Gerontol. Geriatr., 22:271-286, 1996.

第4章

高齢者の社会活動の指標

前章までに示したように、本社会活動指標はきわめて単純な形式をしている。これは、利用しやすさと理解しやすさを最大限に配慮したためであるが、一方、大規模な調査と専門的・理論的検討に基づくものでもある。

本章では、社会活動指標の開発、および、それに関する検討結果について概説する。まず、指標の開発のために実施した調査の概要を述べる。次いで、その調査データに基づいて行った、指標の作成とその基礎的検討について説明する。一般に指標が持っているべき性質を挙げ、本指標がその性質を持つことの吟味結果を述べる。最後に、日常生活動作(ADL)と幸福感を取り上げ、社会活動指標との関連性を示した。

1. 調査の概要

指標開発の基礎資料を得るために実施した、調査の概要を以下に述べる。詳細は文献1)～3)を参照されたい。

調査対象地域は、岐阜県S町、栃木県M町、岐阜県M村、名古屋市S区の4地域である。調査対象者は4地域に居住する65歳以上の男女であり、名古屋市S区では選挙人名簿により無作為抽出した5%標本、他の3地域では全員とした。

第1次調査は1993年に自記式質問票を用いて、名古屋市S区では郵送法、他の3地域では留め置き法で実施した。回収者は性・年齢の記載不明83人を除く5,201人であり、回収率は89%であった。第2次調査は第1次調査回収者を対象として、2年後の1995年に、第1

次調査と同様の内容を含む自記式質問票を用いて、同様の方法で実施した。回収者は5,201人中、4,294人(83%)であった。2回の調査の回収者の性・年齢分布を表4-1に示す。

社会活動を、前述の通り、仕事、社会参加・奉仕活動、学習活動、個人活動の4側面から捉え、自記式質問票にはそれぞれの側面に対応した1項目、6項目、4項目、10項目の計21項目を含めた(表3-3)。

各項目の回答肢は仕事の1項目では「あり」と「なし」とし、それ以外の20項目では「いつも」「ときどき」「なし」とした。指標の吟味を行うために、第1次調査の質問票には、「ご自分でどの程度社会的に活動していると思いますか」という項目(社会活動自己評価

表4-1 調査の回収者数

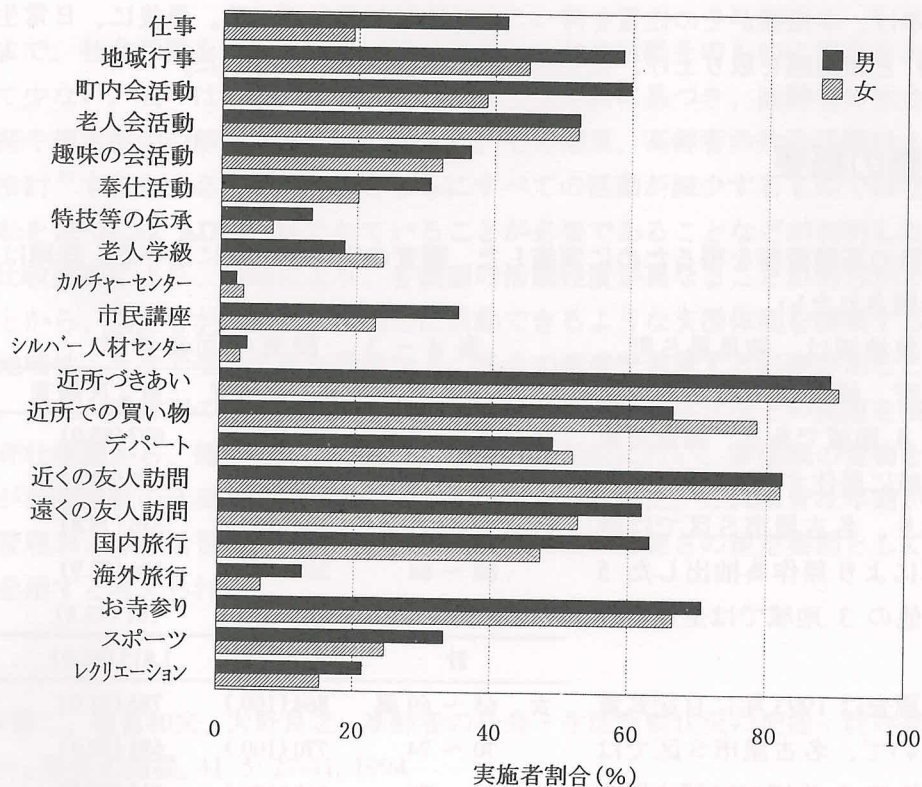
		第1次調査	第2次調査
男	65～69歳	783(100.)	697(89.0)
	70～74	566(100.)	505(89.2)
	75～79	396(100.)	316(79.8)
	80～84	269(100.)	196(72.9)
	85～	203(100.)	101(49.8)
	計	2,217(100.)	1,815(81.9)
女	65～69歳	864(100.)	786(91.0)
	70～74	770(100.)	681(88.4)
	75～79	602(100.)	515(85.5)
	80～84	448(100.)	335(74.8)
	85～	300(100.)	162(54.0)
	計	2,984(100.)	2,479(83.1)

()内は第1次調査回収者数に対する割合(%)

と呼ぶ)を含め、第2次調査の質問票には「この2年間の活動状況の変化」(回答肢は上昇・不変・低下)を4側面ごとに尋ねる項目を含めた。なお、「2. 指標の作成」と「4. 関連要因の検討」では第1次調査データを用い、「3. 指標の吟味」では第1次と第2次調査の両方のデータを用いた。

図4-1に第1次調査に基づく社会活動に関する21項目の実施状況を示す。

図4-1 社会活動に関する項目の実施状況



図では、男女ごとに、「いつも」または「ときどき」と回答した者の割合を棒の長さで表現している。実施者割合が大きい項目は近所づきあい、近所での買い物、近くの友人訪問などであり、小さい項目はカルチャーセンター、シルバー人材センター、海外旅行などであった。多くの項目では、男の実施者割合が女のそれよりも大きく、逆に、近所の買い物などでは女の実施者割合が男のそれよりも大きかった。

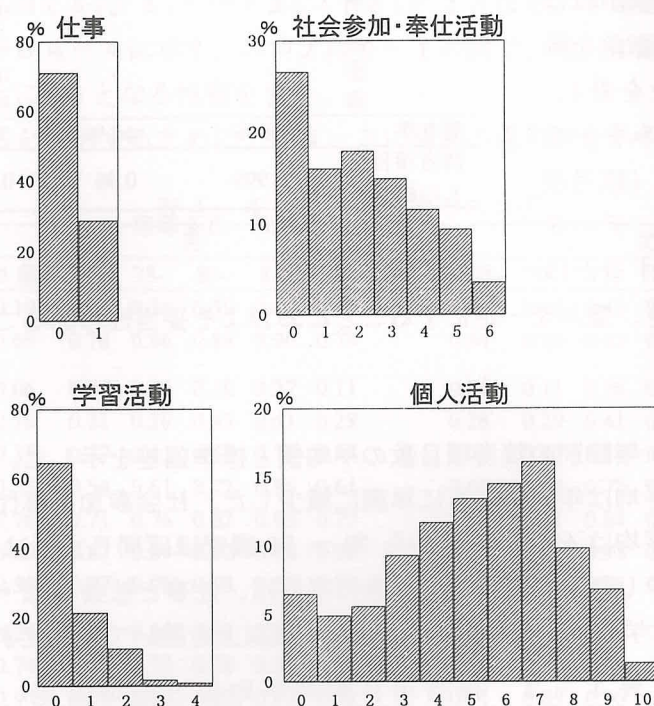
2. 指標の作成

この節では、指標の構造とスコアの与え方について述べる³⁾。

2.1 指標の構造

本指標は、仕事、社会参加・奉仕活動、学習活動、個人活動の4側面ごとに、構成項目の中で「いつも」または「ときどき」と回答した項目数（以下、該当項目数と呼ぶ）とした。なお、「いつも」と「ときどき」を区別しなかったのは、簡便性のためである。該当項目数の分布を、図4-2に示す。該当項目数の範囲は、仕事では0と1、社会参加・奉仕活動では0～6、学習活動では0～4、個人活動では0～10である。

図4-2 該当項目数の分布



一般に、複数の項目をまとめて1つの指標を作成する場合、指標の構造としては、構成する項目の回答に重みを与え、その重みと回答値の積について和を取るといったものが多い。これを重み付き和と呼ぶ。本指標の構造は、上述の通り、該当項目数としたが、これは重みを一定（すべて）1とした重み付き和とみることができる。重みを一定としたことの妥当性を吟味するために、各側面ごとに、構成する項目について主成分分析を行い、その第1主成分（データ情報を最も多く有する重み付き和とみなされる）と該当項目数の相関係数を算定した。

表4-2に、主成分分析結果を示す。

なお、仕事は項目数が1つであり、項目の重みは必然的に1となるゆえ、主成分分析の検討対象外である。第1主成分の因子負荷量（重み付き平均の重みに当たる）は、いずれも正の値でほぼ類似した値を示した。これは、構成項目の間に正の相関関係があることの反

映である。また、第 1 主成分の寄与率は 40 % 前後であり、これは、第 1 主成分が全構成項目の情報の 4 割前後を含んでいることを表している。第 1 主成分と該当項目数の相関係数はいずれの側面もほぼ 1 であり、これは、該当項目数がほぼ第 1 主成分に（定数倍を除いて）相当することを表す。

したがって、重みを一定にした重み付き和（該当項目数に当たる）が、データ情報を最も多く有するとほ

ぼ見なすことができ、重みを一定にすることにおおよそ妥当性のあることが示唆される。

表 4-2 第 1 主成分の因子負荷量および因子得点と該当項目数との相関係数

項目	社会参加・奉仕活動	学習活動	個人活動
因子 ①	0.72	0.68	0.58
負荷量 ②	0.74	0.61	0.62
③	0.60	0.70	0.65
④	0.70	0.67	0.72
⑤	0.71	-	0.70
⑥	0.46	-	0.69
⑦	-	-	0.28
⑧	-	-	0.63
⑨	-	-	0.50
⑩	-	-	0.49
寄与率	44 %	44 %	36 %
該当項目数との相関係数	0.999	0.96	0.997

項目の番号は表 3-3 を参照

2.2 スコア

表 4-3 に、性・年齢別の該当項目数の平均値と標準偏差を示した。仕事と個人活動では、該当項目数の平均は年齢とともに単調に減少した。社会参加・奉仕活動と学習活動では、該当項目数の平均は 65 ~ 69 歳から 70 ~ 74 歳でほぼ同じまたは上昇し、70 歳以上で年齢とともに減少した。男の該当項目数の平均は、仕事と社会参加・奉仕活動では女よりもかなり大きく、学習活動と個人活動では 85 歳以上を除いて女のそれと大差なかった。

表 4-3 該当項目数の平均値と標準偏差

	仕事 (0~1)	社会参加・奉仕活動 (0~6)	学習活動 (0~4)	個人活動 (0~10)
男 65~69歳	0.62 ± 0.49	2.70 ± 1.67	0.55 ± 0.74	6.05 ± 2.13
70~74	0.45 ± 0.50	2.77 ± 1.81	0.69 ± 0.90	5.93 ± 2.31
75~79	0.28 ± 0.45	2.43 ± 1.85	0.65 ± 0.90	5.02 ± 2.60
80~84	0.21 ± 0.41	1.89 ± 1.90	0.49 ± 0.84	4.09 ± 2.82
85~	0.09 ± 0.29	1.10 ± 1.48	0.25 ± 0.56	3.01 ± 2.59
計	0.42 ± 0.49	2.43 ± 1.82	0.57 ± 0.82	5.32 ± 2.60
女 65~69歳	0.32 ± 0.47	2.28 ± 1.72	0.56 ± 0.84	6.14 ± 1.96
70~74	0.20 ± 0.40	2.26 ± 1.72	0.64 ± 0.91	5.64 ± 2.26
75~79	0.14 ± 0.35	1.87 ± 1.80	0.57 ± 0.89	4.76 ± 2.36
80~84	0.08 ± 0.26	1.34 ± 1.55	0.30 ± 0.70	3.69 ± 2.30
85~	0.05 ± 0.23	0.66 ± 1.28	0.14 ± 0.54	2.48 ± 2.22
計	0.19 ± 0.39	1.88 ± 1.75	0.50 ± 0.84	4.96 ± 2.50

平均値 ± 標準偏差

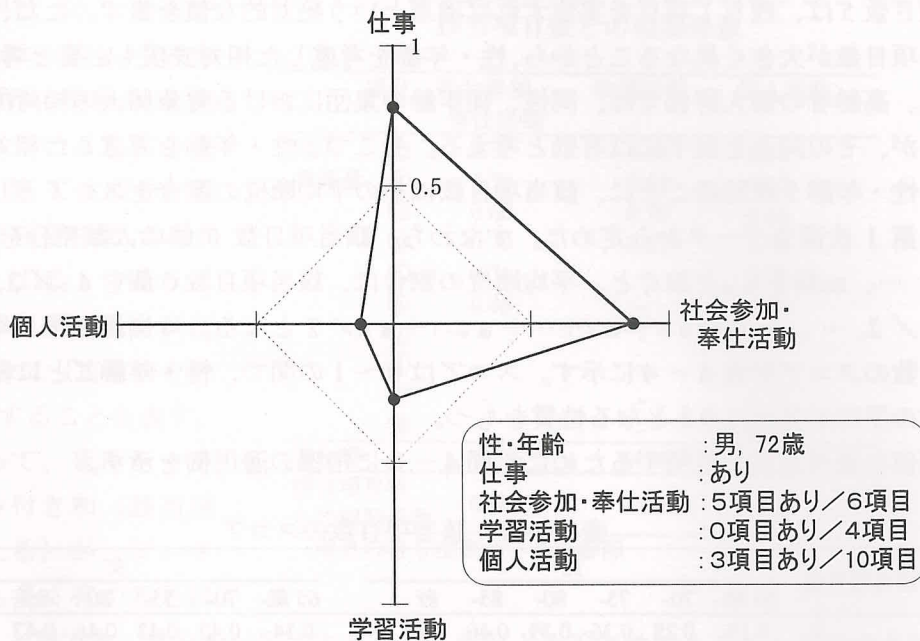
該当項目数は指標の絶対表現である。たとえば、社会参加・奉仕活動6項目において、該当項目数5は、残り1項目を実施すれば満点という絶対的な値を表す。ただ、性・年齢で該当項目数が大きく異なることから、性・年齢を考慮した相対表現も必要と考えられる。とくに、高齢者の個人評価では、同性、同年齢の集団における対象個人の相対的位置を表すことが、その向上を促すには有効と考える。そこで、性・年齢を考慮した相対表現としては、性・年齢5歳階級ごとに、該当項目数にその平均順位の割合をスコアとし、そのスコアを第1次調査データから定めた。すなわち、該当項目数0個の人数割合を a_0 、1個を a_1 、…、 m 個を a_m とおくと、平均順位の割合は、該当項目数0個を $a_0/2$ 、1個を $a_0 + a_1/2$ 、…、 m 個を $a_0 + a_1 + \dots + a_{m-1} + a_m/2$ となる。4側面、性・年齢別の該当項目数のスコアを表4-4に示す。スコアは0～1の間で、性・年齢ごとにみれば、集団全体の平均が完全に0.5となる性質をもつ。

指標値の適用方法を説明するために、図4-3に指標の適用例を示す。

表4-4 該当項目数のスコア

該当項目数	男						女						
	65歳-	70-	75-	80-	85-	計	65歳-	70-	75-	80-	85-	計	
仕事	0	0.19	0.28	0.36	0.39	0.46	0.29	0.34	0.40	0.43	0.46	0.47	0.40
	1	0.69	0.78	0.86	0.89	0.96	0.79	0.84	0.90	0.93	0.96	0.97	0.90
社会参加・ 奉仕活動	0	0.06	0.07	0.10	0.18	0.27	0.11	0.09	0.11	0.16	0.20	0.34	0.15
	1	0.18	0.21	0.29	0.43	0.61	0.28	0.28	0.29	0.41	0.52	0.77	0.40
	2	0.35	0.37	0.45	0.57	0.75	0.44	0.48	0.47	0.58	0.72	0.88	0.58
	3	0.57	0.54	0.61	0.72	0.86	0.61	0.66	0.65	0.72	0.85	0.93	0.73
	4	0.76	0.71	0.76	0.82	0.93	0.77	0.81	0.81	0.84	0.91	0.96	0.85
	5	0.89	0.87	0.89	0.90	0.98	0.90	0.92	0.93	0.93	0.96	0.97	0.93
学習活動	0	0.29	0.27	0.29	0.34	0.41	0.30	0.31	0.30	0.32	0.40	0.46	0.34
	1	0.74	0.68	0.70	0.78	0.87	0.73	0.74	0.70	0.74	0.87	0.94	0.77
	2	0.94	0.89	0.89	0.92	0.97	0.92	0.91	0.89	0.90	0.96	0.98	0.92
	3	0.99	0.98	0.97	0.98	1.00	0.98	0.98	0.98	0.98	0.99	0.98	0.98
	4	1.00	1.00	0.99	1.00	1.00	1.00	1.00	0.99	0.99	0.99	0.99	0.99
個人活動	0	0.01	0.01	0.03	0.08	0.12	0.03	0.01	0.01	0.03	0.05	0.13	0.03
	1	0.02	0.04	0.10	0.20	0.31	0.09	0.02	0.04	0.08	0.15	0.34	0.09
	2	0.05	0.07	0.16	0.29	0.43	0.14	0.04	0.07	0.13	0.25	0.47	0.14
	3	0.10	0.12	0.23	0.38	0.53	0.20	0.08	0.14	0.22	0.39	0.60	0.23
	4	0.18	0.20	0.34	0.46	0.63	0.29	0.15	0.23	0.38	0.56	0.75	0.35
	5	0.29	0.31	0.46	0.58	0.75	0.40	0.26	0.36	0.55	0.72	0.86	0.48
	6	0.44	0.48	0.60	0.72	0.84	0.55	0.41	0.52	0.69	0.84	0.93	0.61
	7	0.64	0.65	0.75	0.83	0.91	0.71	0.63	0.69	0.81	0.91	0.96	0.76
	8	0.82	0.79	0.87	0.91	0.97	0.85	0.83	0.85	0.90	0.95	0.98	0.89
	9	0.93	0.92	0.95	0.97	0.99	0.94	0.95	0.94	0.96	0.99	0.99	0.96
	10	0.99	0.99	0.99	1.00	1.00	0.99	1.00	0.99	0.99	1.00	1.00	1.00

図4-3 社会活動指標の適用例



この例は、72歳の男で、仕事あり、社会参加・奉仕活動5項目あり、学習活動0項目あり、個人活動3項目ありであり、各々の指標値は表4-4より0.78、0.87、0.27、0.12となる。男の70～74歳の中で、仕事と社会参加・奉仕活動の面では活動性が高く（この対象者より活動性の低い人は70%以上あるいは高い人が30%未満）、学習活動と個人活動の面では活動性が低い（この対象者よりも活動性の低い人は30%未満）ことを表している。なお、仕事の該当項目数は0か1であり、すべての人をこれで順序づけることはできない。この場合、かりに仕事なしの人が60%であれば、仕事なしの人を0～60%の順位の平均（30%）に位置させ、仕事ありの人を61～100%の順位の平均（80%）に位置させるのが自然であり、本スコアはそのように定めている。このスコアを定める集団として、調査対象の4地域集団を用いたが、社会活動については地域差がかなり大きいと考えられ、この集団が全国を代表している保証はない。その影響として、指標値を全体に過小あるいは過大評価している可能性があり、全国規模の調査を行って、スコアの正確性を一層向上させることが今後の課題であろう。

3. 指標の吟味

一般に、指標には再現性と妥当性がある程度高いことが求められる^{4, 5)}。それ以外に、望ましい性質として、感度の高さがある。再現性とは、状態が変わらなければ、ほぼ同じ指標値が再現されることをいう。妥当性とは、指標が本来の意図した概念にほぼ対応することをいい、内容的妥当性、構成概念妥当性、基準関連妥当性に大別される。内容的妥当性の吟味は指標の内容面（構成する項目）をみることである。構成概念妥当性の吟味には様々な方法があるが、その中に、比較的類似した概念を有する別の指標との関連性を見る方法がある。基準関連妥当性は基準となる指標（ゴールドスタンダード）が既にある場合

にそれとの関連性を見るものである。また、感度とは状態の変化を指標が反映することをいう。

以下に、本指標の再現性、妥当性と感度の検討の概要を示す³⁾。なお、妥当性としては、基準関連妥当性は基準となる指標がないゆえ検討対象に含められないので、内容的妥当性と構成概念妥当性を検討対象とした。

3.1 再現性

再現性の検討として、第2次調査で「この2年間の活動状況の変化」の項目に不変と回答した者において、第1次と第2次調査の間で、該当項目数の平均値を比較するとともに、スピアマンの順位相関係数を算出した。

社会参加・奉仕活動、学習活動、個人活動の再現性の成績を表4-5に示す。なお、仕事は有無のみを尋ねたものであるゆえ、とくに再現性の吟味は不要と判断し検討の対象外とした。「この2年間の活動状況の変化」の項目に不変と回答した者において、第1次と第2次調査間の該当項目数の差の平均はいずれの側面も0に近かった。スピアマンの順位相関係数は0.60～0.71であった。

表4-5 社会参加・奉仕活動、学習活動、個人活動の指標の再現性

	社会参加・奉仕活動	学習活動	個人活動
解析人数 ^{#1}	1,386	1,427	1,256
第1次調査の該当項目数 ^{#2}	2.43±1.77	0.58±0.84	5.84±2.27
第2次調査の該当項目数 ^{#2}	2.42±1.94	0.55±0.89	5.92±2.42
該当項目数の差 ^{#2}	-0.01±1.44	-0.03±0.81	0.08±1.74
スピアマンの順位相関係数	0.71	0.60	0.70

^{#1}：各活動ごとに、両調査の有効回答者かつ両調査間で活動状況が不変と回答した者。

^{#2}：該当項目数の平均値±標準偏差

この再現性の程度は、食習慣などの調査項目における再現性とほぼ同じ程度であり^{6,7)}、利用上、本指標がある程度十分な再現性を有すると考えられる。本検討は、2年間隔で実施した2回の調査間での指標の一致性をみている。「この2年間の活動状況の変化」の項目に不変と回答した者に限定したものの、実際には変化している者を含む可能性があり、これは、指標の再現性を過小評価する方向に影響したと考えられる。

3.2 妥当性

内容的妥当性は、指標の構成項目が妥当か否かの問題である。本指標の構成項目の選定方法については、前章で述べた通りである。すなわち、全国の市町村の高齢者対策担当者に対して「高齢者が社会的に活動性が高いと考える活動」を調査した⁸⁾。そこから得られた項目に基づいて、平成4年度厚生科学研究費補助金長寿科学総合研究事業による「高齢者の社会活動に関する研究」班の構成員が議論し、構成項目を選定した。このような過程を経ていることから、本指標は内容的妥当性のある程度有するとみることができよう。

構成概念妥当性の検討としては、社会活動自己評価を外的基準とし、4側面ごとに、自己評価の回答肢間で指標値の平均値を比較した。社会活動自己評価は、他に替わる適当な

ものが見あたらなかったために選んだが、主観的であるものの、社会活動の状況にある程度反映すると思われる。社会活動自己評価別の指標値の平均と標準偏差を表4-6に示す。4 側面および男女ともに、社会活動自己評価の低い者ほど単調に指標値の平均が低下し、いずれの傾向も有意であった。男女ともに社会参加・奉仕活動と個人活動では、社会活動自己評価のカテゴリー間で指標値に2倍程度の格差があった。男の仕事と男女の学習活動も1.5倍程度の格差があり、女の仕事では1.2倍程度であった。

表4-6 社会活動自己評価別の社会活動指標の平均値と標準偏差

社会活動自己評価		仕事	社会的活動	学習的活動	個人的活動
男	かなり実施	164 0.60 ± 0.23	141 0.72 ± 0.24	146 0.68 ± 0.26	136 0.70 ± 0.26
	やや実施	201 0.53 ± 0.24	174 0.69 ± 0.23	181 0.65 ± 0.25	165 0.66 ± 0.26
	普通	820 0.52 ± 0.24	700 0.59 ± 0.25	722 0.54 ± 0.26	666 0.57 ± 0.26
	あまり実施なし	383 0.49 ± 0.22	343 0.39 ± 0.25	353 0.41 ± 0.20	331 0.44 ± 0.24
	実施なし	419 0.42 ± 0.18	384 0.27 ± 0.20	393 0.37 ± 0.16	368 0.29 ± 0.24
女	かなり実施	43 0.59 ± 0.22	39 0.75 ± 0.27	37 0.73 ± 0.22	34 0.70 ± 0.29
	やや実施	131 0.53 ± 0.22	110 0.71 ± 0.23	117 0.68 ± 0.26	107 0.66 ± 0.27
	普通	825 0.51 ± 0.21	687 0.64 ± 0.26	731 0.58 ± 0.26	664 0.63 ± 0.25
	あまり実施なし	645 0.51 ± 0.20	590 0.51 ± 0.25	611 0.49 ± 0.23	562 0.53 ± 0.26
	実施なし	967 0.48 ± 0.15	914 0.36 ± 0.23	937 0.42 ± 0.16	899 0.37 ± 0.26

人数 指標値の平均値±標準偏差

このように、本指標は社会活動自己評価と強く関連しており、ある程度構成概念妥当性を有することが示唆された。なお、女の仕事の指標値の平均が社会活動自己評価の高低で格差が小さかったが、これは、女の高齢者における社会活動という言葉の捉え方に関係していると推察される。

3.3 感度

感度の検討として、「この2年間の活動状況の変化」の項目に上昇（または低下）と不変と回答した者の間で、第1次と第2次調査の該当項目数の差を比較した。社会参加・奉仕活動、学習活動、個人活動の感度の成績を表4-7に示す。なお、仕事は有無のみを尋ねたものゆえ感度の検討対象外とした。

表4-7 社会参加・奉仕活動、学習活動、個人活動の指標の感度

		社会参加・奉仕活動		学習活動		個人活動	
		人数	該当項目数の差 ^{#1}	人数	該当項目数の差 ^{#1}	人数	該当項目数の差 ^{#1}
活動状況	上昇	63	0.84 ± 1.53**	42	0.57 ± 1.11**	49	0.73 ± 1.87**
の変化	不変	1386	-0.01 ± 1.44	1427	-0.03 ± 0.89	1256	0.08 ± 1.74
	低下	283	-0.70 ± 1.67**	237	-0.34 ± 0.79**	243	-1.14 ± 2.32**
活動上昇	感度 ^{#2}		58.7%		42.9		55.1
	特異度		68.6		85.0		62.6
活動低下	感度		47.7		27.4		60.1
	特異度		69.1		82.6		66.0

^{#1}：平均値±標準偏差

^{#2}：該当項目数の差による判定基準を、-1以下を低下、0を不変、1以上を上昇とした。

**：活動状況が不変との間における平均値の差の検定で、p < 0.01

各側面ともに、「この 2 年間の活動状況の変化」の項目に上昇と回答した者は不変と回答した者に比べて、第 1 次と第 2 次調査の該当項目数の差が有意に大きく、該当項目数の差の群間差が 0.60 ～ 0.85 であった。「この 2 年間の活動状況の変化」の項目に低下と回答した者は不変と回答した者に比べて、該当項目数の差が有意に小さく、該当項目数の差の群間差が 0.31 ～ 1.22 であった。これらの結果は、本指標が集団の推移の観察という面では、ある程度の感度を有することを示唆している。

別の検討として、第 1 次と第 2 次調査の該当項目数の差に基づいて活動状況の変化を判定し、「この 2 年間の活動状況の変化」の項目の回答を基準とする感度と特異度を算定した。該当項目数の差に基づく判定は - 1 以下を低下、0 を不変、1 以上を上昇とした。その結果、活動上昇と低下の感度は 27.4 ～ 60.1 % であり、特異度は 62.6 ～ 85.0 % であった。これらの感度と特異度は高いものとはいえ、個人の推移の観察という面では本指標の感度が低いと考えられた。これは、各側面の構成項目の回答肢を活動の有無のみとし、活動頻度を考慮しなかったためと推察される。ただ、活動頻度を考慮すると、前述のように指標がより複雑になり、必ずしも利用上適切ともいえない。この点は、指標の改善という面でさらに検討を要する課題と考えられる。

4. 関連要因の検討

社会活動の関連要因として、性・年齢については既に検討を行った。ここでは、日常生活動作 (ADL) と幸福感を取り上げる⁹⁾。ADL を取り上げたのは、それが社会活動の実施状況を規定する最も大きな要因の 1 つと考えたためである。幸福感については、社会活動の充実による効果として最も重要な側面と考えたためである。

4.1 ADL

表 4-8 に、第 1 次調査データに基づく ADL の状況を示す。

表 4-8 ADL の状況

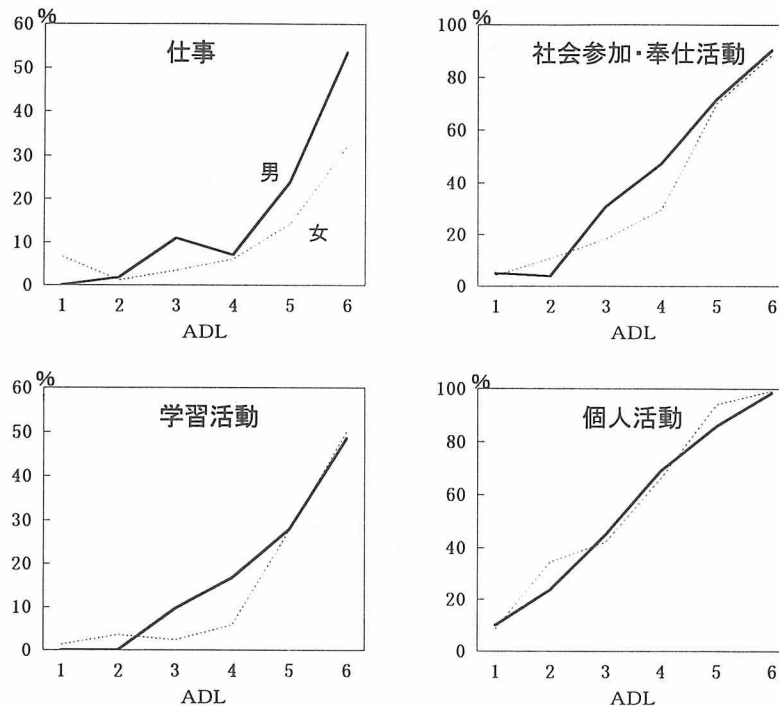
ADL	男	女
1. 寝たきり、あるいはほとんど寝たきり	46 (2.1%)	79 (2.7%)
2. 寝たり、起きたり	59 (2.7)	88 (3.0)
3. 起きてはいるが、あまり動かない	61 (2.8)	93 (3.2)
4. 少しは動く	61 (2.8)	120 (4.1)
5. 家の中では普通にほぼ不自由なく、隣近所は一人で外出	522 (24.1)	1547 (53.3)
6. 活発に動き、電車・バス・タクシーなどで外出できる	1413 (65.4)	976 (33.6)
計	2162 (100.)	2903 (100.)

ADL が低い者 (「1. 寝たきり、あるいはほとんど寝たきり」または「2. 寝たり、起きたり」) は、男 4.8 %、女 5.7 % であった。一方、ADL がほぼ保たれている者 (「5. 家の中では普通にほぼ不自由なく、隣近所は一人で外出」または「6. 活発に動き、電車・バス・タクシーなどで外出できる」) は、男 89.5 %、女 86.9 % であった。本対象者には 85 歳以上の者が 1 割程度含まれているが、ほとんどの高齢者で ADL がほぼ保持されているこ

とが分かる。

図4-4に、ADLと社会活動指標との関連を示す。図では、仕事、社会参加・奉仕活動、学習活動、個人活動ごとに、該当項目数1以上の者の割合をADLの回答(1～6)別に示している。なお、個人活動では構成項目数が他の側面よりも多いゆえ、該当項目数2以上の者の割合を用いた。いずれの側面、男女ともに、ADLが高いほど、該当項目数

図4-4 ADLと社会活動指標との関連



ADLのコードは表4-8を参照。
個人活動では、該当項目数2以上の者の割合、それ以外は1以上の者の割合。

1以上(個人活動では2以上)の者の割合は急速に上昇していた。ADLが低い者(1または2)では、仕事、社会参加・奉仕活動、学習活動ともに、0～11%であり、個人活動でも8～35%であった。ADLがほぼ保たれている者(5または6)では、仕事が14～54%、学習活動が28～50%であり、社会参加・奉仕活動と個人活動では70～99%であった。

以上より、ADLが低い者では、仕事、社会参加・奉仕活動、学習活動の該当項目数がほとんど0であり、個人活動でもきわめて低く、これより、ADLのある程度の保持が社会活動実施の必要条件であることが示唆される。ほとんどの高齢者はADLがほぼ保持されており、そういう者では、いずれの側面でも該当項目数0は少なく、社会活動実施の必要条件はおおよそ満たされているとみることができる。今後、社会活動実施の必要条件を満たした者において、社会活動促進の関連要因を検討することが重要であろう。

4.2 幸福感

表4-9に、第1次調査データに基づく幸福感の状況を示す。なお、ADLがあまり保持されていない者(1~4)では、それが幸福感に影響を及ぼす可能性も高いゆえ解析の対象から除外した。幸福感の状況は男女でほとんど一致しており、「幸せである」が46%、「やや幸せである」が7~8%、「普通」が44%、「やや幸せでない」が2%、「幸せでない」が1%であった。幸福感の質問自体が大変難しい問題であるが、この結果からは、幸福感の低い者はごくわずかであった。

図4-5に、幸福感と社会活動指標との関連を示す。仕事、社会参加・奉仕活動、学習活動、個人活動ごとに、指標値により4つの群(0.24以下、0.25~0.49、0.50~0.74、0.75以上)に区分し、各群別に「幸せである」と回答した者の割合を算定した。

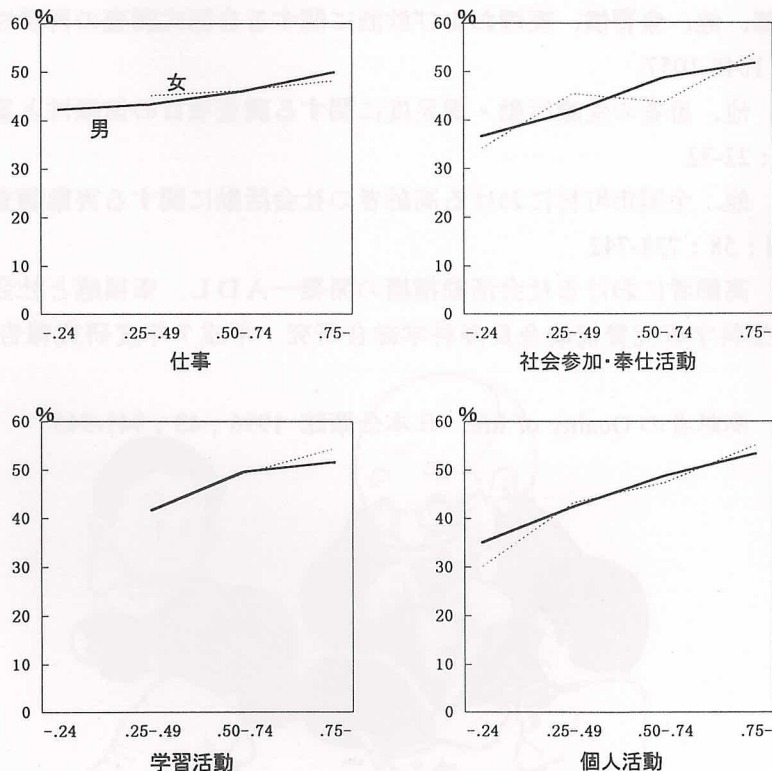
表4-9 幸福感の状況

幸福感	男	女
幸せである	885 (45.5%)	1,170 (45.8%)
やや幸せである	145 (7.5)	166 (6.5)
普通	861 (44.2)	1,130 (44.2)
やや幸せでない	41 (2.1)	62 (2.4)
幸せでない	14 (0.7)	29 (1.1)
計	1,946 (100.)	2,557 (100.)

ADLの回答が1~4を除く(表4-8を参照)

なお、表4-9と同様に、ADLがあまり保持されていない者(1~4)を解析の対象外とした。また、スコアの付け方から(表4-4参照)、仕事の女では、指標値0.24以下

図4-5 幸福感と社会活動指標との関連



幸福感を「幸せ」と回答した者の割合(表4-9を参照)。

と 0.50 ~ 0.74 の群に該当者がおらず、学習活動の男女では 0.24 以下の群に該当者がいない。

いずれの側面、男女ともに、指標値が高い群ほど、「幸せである」と回答した者の割合が高くなっていた。指標値 0.75 以上の群では、0.24 以下の群に比べて、10 %程度あるいはそれ以上高い傾向であった。この結果からは、社会活動指標と幸福感の関連性が示唆されるが、社会活動指標値が大きいと幸福感が向上するのか、逆に、幸福感が高いと社会活動指標値が上昇するのかは分からない。今後、幸福感に関連する他の要因も考慮して、社会活動の上昇が幸福感などの向上に結びつくかどうかを、検討することが重要であろう¹⁰⁾。

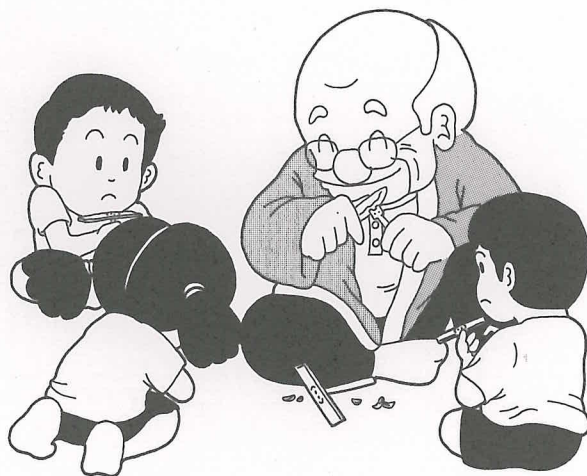
文献

- 1) 玉腰暁子, 他. 高齢者における社会活動の実態. 日本公衛誌 1995 ; 42 : 888-896.
- 2) Aoki R, et al. Lifestyle determinants for social activity levels among the Japanese elderly. Arch. Gerontol. Geriatr. 1996 ; 22 : 271-286.
- 3) 橋本修二, 他. 高齢者における社会活動状況の指標の開発. 日本公衛誌 1997 ; 44 : 760-768.
- 4) Streiner DL, Norman GR. Health measurement scales second ed. Tokyo : Oxford Univ. Press, 1995.
- 5) Guyatt G, Walter S, Norman G. Measuring change over time: assessing the usefulness of evaluative instructions. J. Chron. Dis. 1987 ; 40 : 171-178.
- 6) 小笹晃太郎, 他. 食習慣, 喫煙および飲酒に関する自記式調査の再現性の検討. 日衛誌 1994 ; 48 : 1048-1057.
- 7) 村上義孝, 他. 患者の受療行動・満足度に関する調査項目の信頼性と妥当性. 日本公衛誌 1997 ; 1 : 22-32.
- 8) 玉腰暁子, 他. 全国市町村における高齢者の社会活動に関する実態調査の実施状況. 公衆衛生 1994 ; 58 : 738-742.
- 9) 永井正規. 高齢者における社会活動指標の開発—A D L、幸福感と社会活動との関連—. 厚生省厚生科学研究費補助金長寿科学総合研究 平成 7 年度研究報告 Vol. 8, 1996 : 368-374.
- 10) 柴田 博. 高齢者の Quality of life. 日本公衛誌 1996 ; 43 : 941-945.

おわりに

個人がどれほど活発な社会活動をして、あるいはしなくても、それについて他人からとやかく言われる筋合いはありません。高齢者が社会活動することは社会の活性化につながるでしょうが、それ自体が本人の生きがいの一つとなっているものでしょう。「いきいき社会活動チェック表」は客観的な尺度を提供していますが、これを使って他人を評価することを主な目的とするものではありません。高齢者が自らの社会活動を自ら評価し、自らの意欲に基づいてより活発な社会活動をするきっかけにするために使っていただきたいと考えます。

「チェック表」は簡潔にできていますが、第二部でご覧いただいたように、細かな検討、実地の調査結果に基づいています。しかし、例えば自分の一つ一つの活動が調査項目に入らないため、活発であるという判定が得られないといった不満を感じられることがあるかも知れません。また、記載しにくい、判定の仕方が難しいなどのご意見をいただいて改変したのですが、まだ不十分な点が残っているかもしれません。不十分な点、ご不満な点など感じられたところを遠慮なくお知らせいただきたいと思います。また、使って良かったと感じられたら、是非、それについてもお知らせ下さい。



いきいき社会活動チェック表
男性用
女性用

いきいき社会活動チェック表

あなたも挑戦

【男性用】

あなたの家庭の外での、人とふれあう活動が、同年代の人と比べて、活発であるかどうかを判定することができます。

- ＜やり方＞
- ①下のいろいろな日常の活動について、「時々またはいつもしている」または「していない」のどちらかに○をつけてください。
 - ②それぞれの分野ごとに、「時々またはいつもしている」の○の数を数えて合計点数を出してください。
 - ③右のいきいき社会活動判定表で、あなたの年齢、点数の色を見て判定します。社会活動の種類によって、4側面での判定ができます。個人的活動から仕事までやってみましょう。

＜判定表の書き方＞

- ①あなたの年齢に○をつけ縦の線をなぞりましょう。
- ②合計点数に○をつけ横の線をなぞりましょう。
- ③両方の線の交わった点のあるまわりの色が、あなたの活発度です。

個人活動

日常の活動	時々またはいつもしている	していない
近所つきあい	1	0
生活用品や食料品の買い物（近所での買い物）	1	0
デパートでの買い物	1	0
近くの友人・友達・親戚を訪問	1	0
遠方の友人・友達・親戚を訪問	1	0
国内旅行	1	0
外国旅行	1	0
お寺まわり（神社仏閣へのおまいり）	1	0
スポーツや運動	1	0
レクリエーション活動	1	0
合計	<input type="text"/>	<input type="text"/>

個人活動

合計

点

社会参加・奉仕活動

日常の活動	時々またはいつもしている	していない
地域行事（お祭り・盆踊りなど）への参加	1	0
町内会や自治会活動	1	0
老人会（老人クラブ）活動	1	0
趣味の会など仲間うちの活動	1	0
奉仕（ボランティア）活動	1	0
特技や経験を他人に伝える活動	1	0
合計	<input type="text"/>	<input type="text"/>

社会参加・奉仕活動

合計

点

学習活動

日常の活動	時々またはいつもしている	していない
老人学級・老人大学への参加	1	0
カルチャースセンターでの学習活動	1	0
市民講座・各種研修会・講演会への参加	1	0
シルバークラス（能力活用）センター活動	1	0
合計	<input type="text"/>	<input type="text"/>

学習活動

合計

点

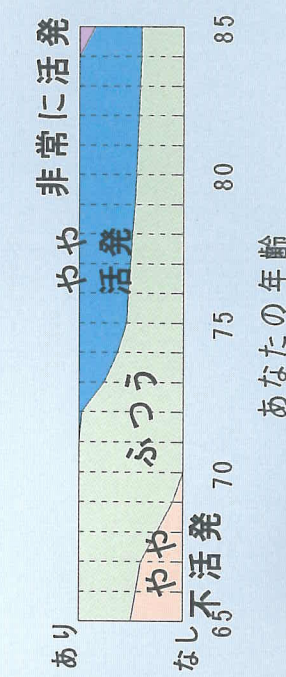
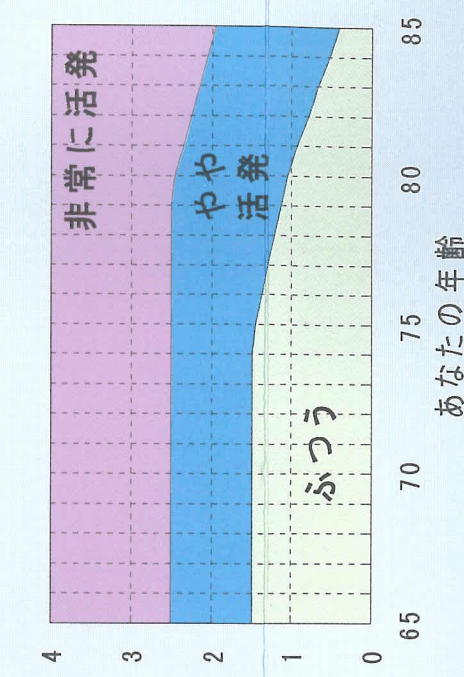
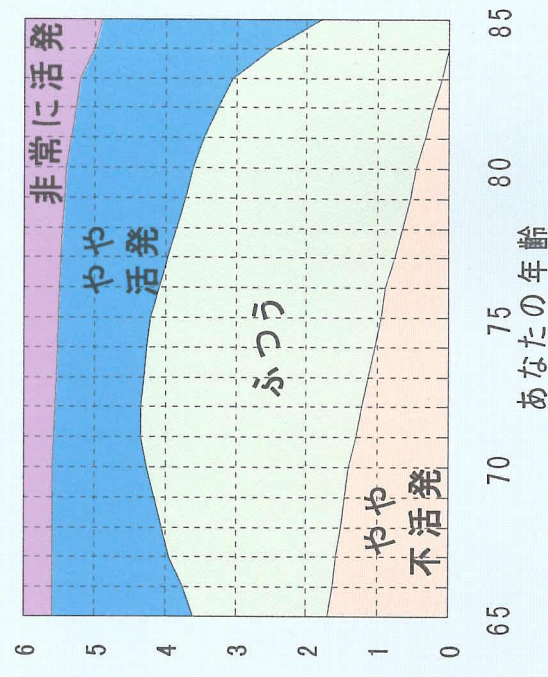
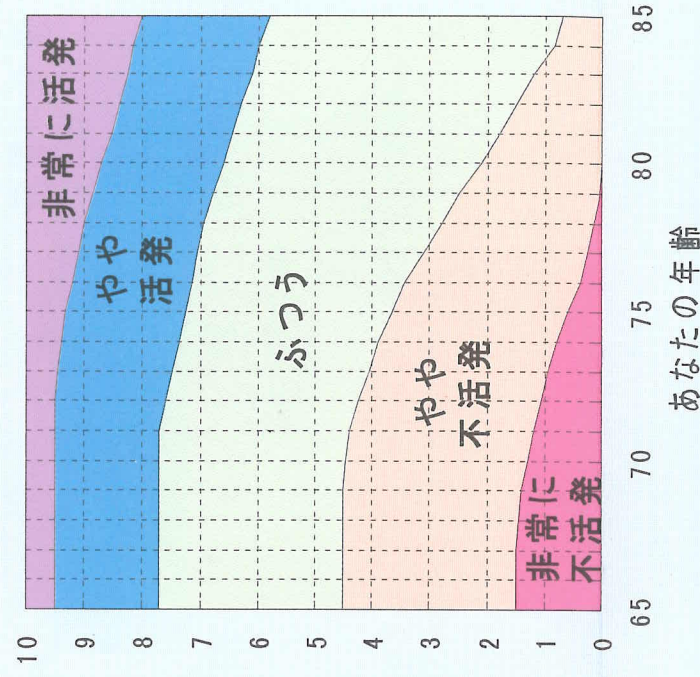
仕事

活動	あり	なし
収入のある仕事についていますか	1	0

＜判定結果の見方＞

- やや活発・非常に活発の方：あなたの社会活動は、同年代の人より活発です。
 ふつうの方：あなたの社会活動は、同年代の人と同じくらい活発です。
 やや不活発・非常に不活発の方：あなたの社会活動は、同年代の人より不活発です。

個人活動、社会参加・奉仕活動、学習活動、仕事の4つの分野で、活発な分野はますますのばし、不活発な分野は少し意識して参加するようにしてみましょう。なお、持病のある方は、主治医に相談して無理をしないでください。



いきいき社会活動チェック表

あなたも挑戦

【女性用】

あなたの家庭の外での、人とふれあう活動が、同年代の人と比べて、活発であるかどうかを判定することができます。

＜やり方＞

- ①下のいろいろな日常の活動について、「時々またはいつもしている」または「していない」のどちらかに○をつけてください。
- ②それぞれの分野ごとに、「時々またはいつもしている」の○の数を数えて合計点数を出してください。
- ③右のいきいき社会活動判定表で、あなたの年齢、点数の色を見て判定します。

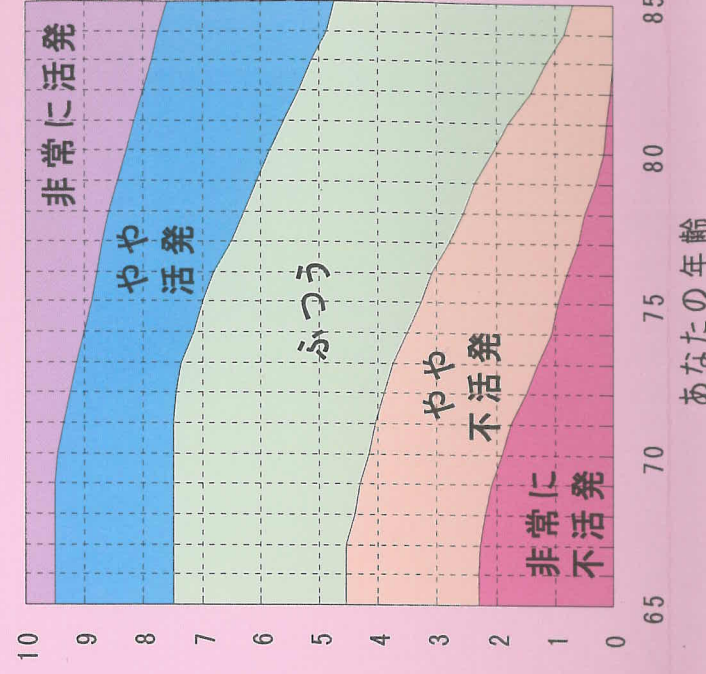
社会活動の種類によって、4側面での判定ができます。
個人的活動から仕事までやってみましょう。

＜判定表の書き方＞

- ①あなたの年齢に○をつけ縦の線をなぞりましょう。
- ②合計点数に○をつけ横の線をなぞりましょう。
- ③両方の線の交わった点のあるまわりの色が、あなたの活発度です。

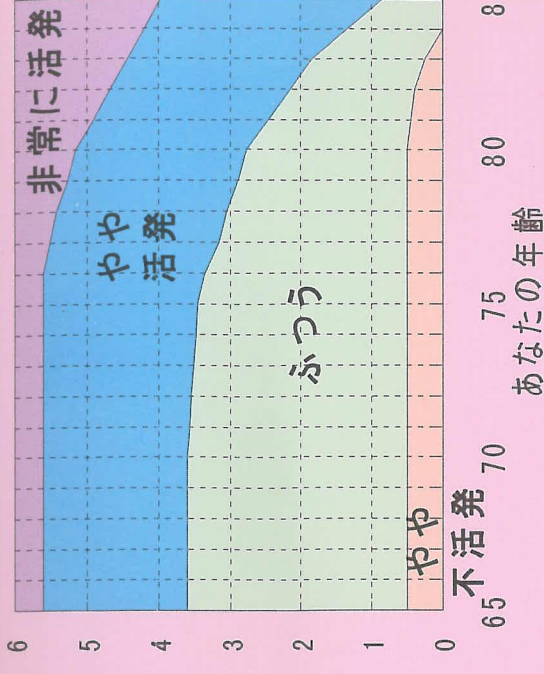
個人活動

日常の活動	時々またはいつもしている	していない
近所つきあい	1	0
生活用品や食料品の買い物（近所での買い物）	1	0
デパートでの買い物	1	0
近くの友人・友達・親戚を訪問	1	0
遠方の友人・友達・親戚を訪問	1	0
国内旅行	1	0
外国旅行	1	0
お寺まいり（神社仏閣へのおまいり）	1	0
スポーツや運動	1	0
レクリエーション活動	1	0
個人活動	合計	点



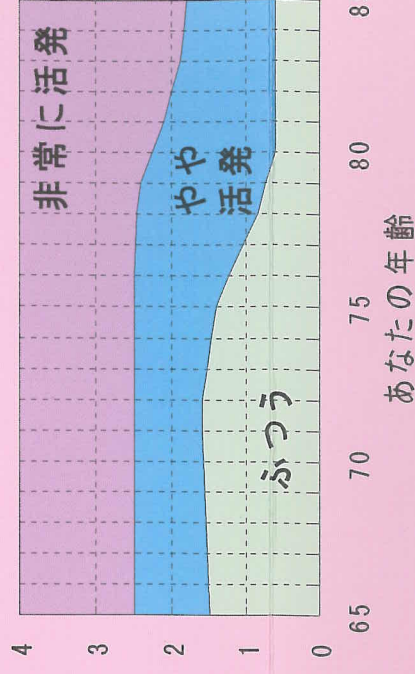
社会参加・奉仕活動

日常の活動	時々またはいつもしている	していない
地域行事（お祭り・盆踊りなど）への参加	1	0
町内会や自治会活動	1	0
老人会（老人クラブ）活動	1	0
趣味の会など仲間うちの活動	1	0
奉仕（ボランティア）活動	1	0
特技や経験を他人に伝える活動	1	0
社会参加・奉仕活動	合計	点



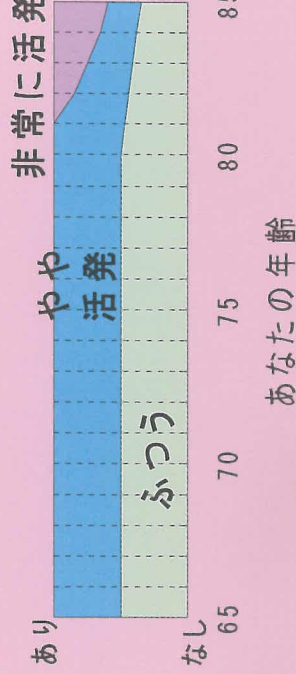
学習活動

日常の活動	時々またはいつもしている	していない
老人学級・老人大学への参加	1	0
カルチャースセンターでの学習活動	1	0
市民講座・各種研修会・講演会への参加	1	0
シルバークリニック（能力活用）センター活動	1	0
学習活動	合計	点



仕事

活動	あり	なし
収入のある仕事についていますか	1	0
仕事	合計	点



＜判定結果の見方＞

やや活発・非常に活発の方：あなたの社会活動は、同年代の人より活発です。
ふつうの方：あなたの社会活動は、同年代の人と同じくらいの活発さです。

やや不活発・非常に不活発の方：あなたの社会活動は、同年代の人より不活発です。

個人活動、社会参加・奉仕活動、学習活動、仕事の4つの分野で、活発な分野はますますのばし、不活発な分野は少し意識して参加するようになしてみよう。なお、持病のある方は、主治医に相談して無理をし過ぎないようにしよう。

社会活動に関する資料

✧ 社会活動とは ✧

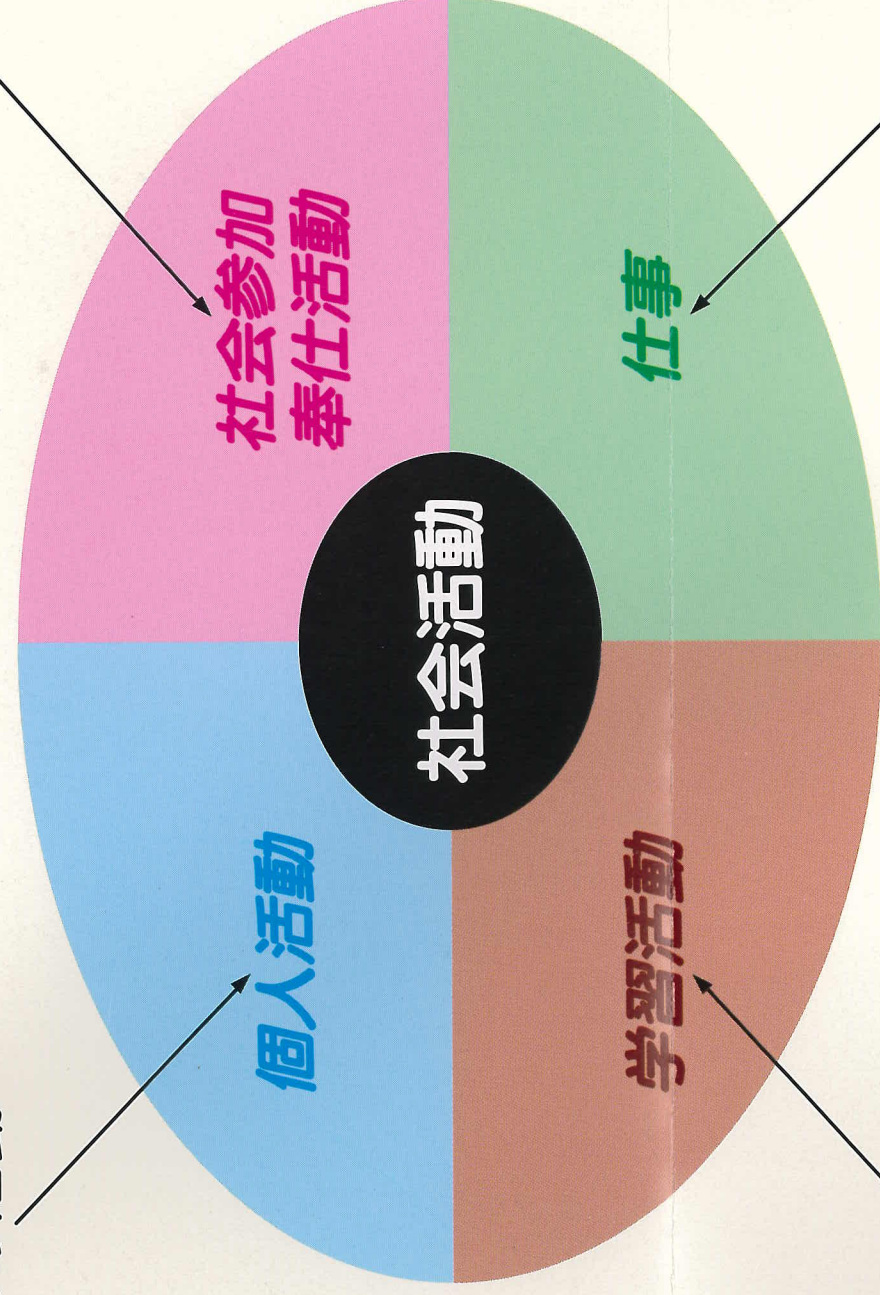
社会に出て人とふれあう活動のすべてを社会活動
といいます。

その中でも、社会活動の種類によって大きく4つ
に分かれます。

個人活動・社会参加奉仕活動・学習活動・仕事

日常の個人の生活や
個人の楽しみのための
社会での活動

地域社会における行事、
奉仕活動への参加



学習を目的とした
社会での活動

収入を得ている仕事



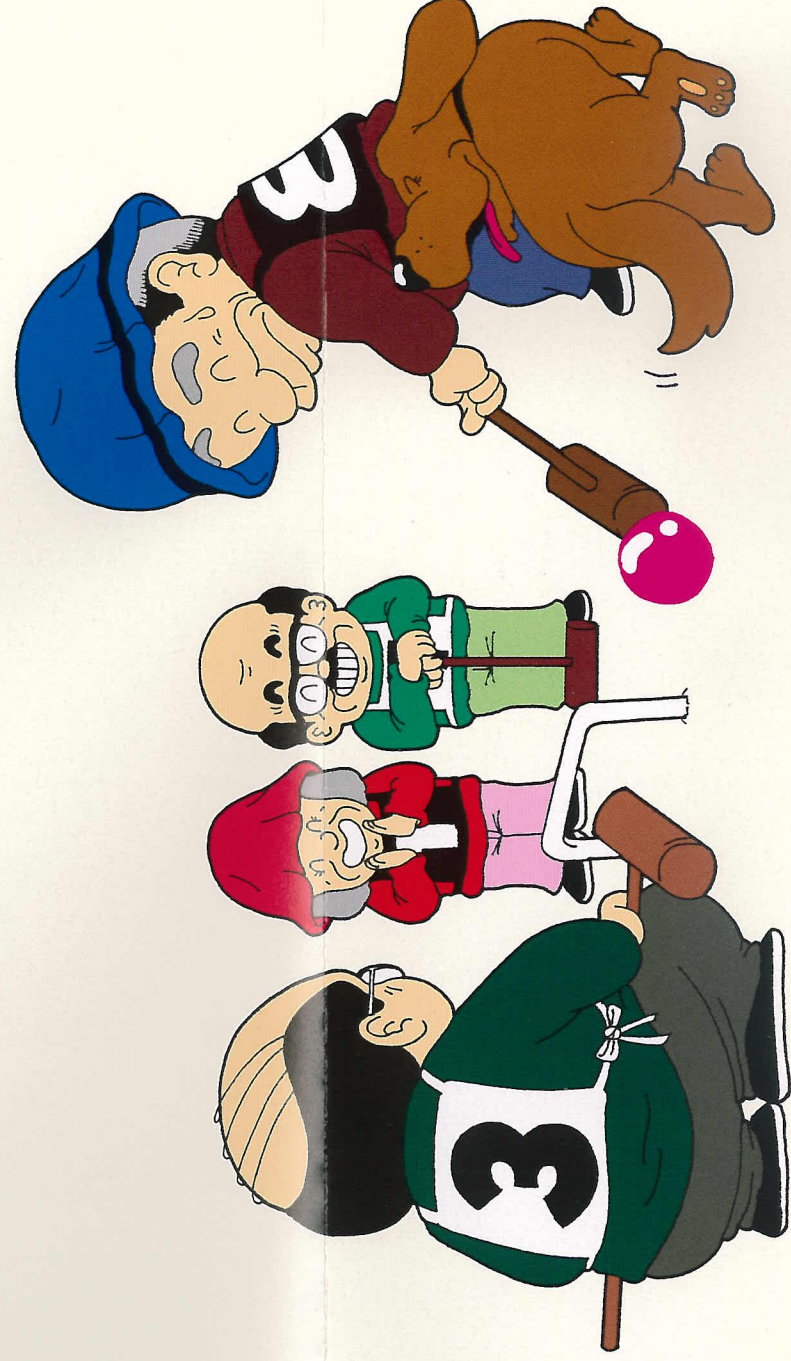
◆あなたの社会活動は活発ですか？

◆社会活動の活発度は、個人の年齢や性別、健康状態によって影響を受けます。

◆社会活動が活発な人は、いきいきとして幸せに暮らしている人が多いということが知られています。

◆あなたは、同年代の同性の人と比べて活発ですか？
あなたも社会活動の活発度をチェックしてみてくださいませんか？

◆個人活動・社会参加奉仕活動・学習活動・仕事
の4つの分野で活発な分野はますますのばし、
不活発な分野は少し意識して参加しましょう。



◆あなたも新しい生きがいを見つけてみてくださいませんか？

いきいき社会活動チェック表 利用の手引き

1998年1月15日発行

編集 大野良之

〒466 名古屋市昭和区鶴舞町65

名古屋大学医学部予防医学教室

電話：052-744-2132

ファクシミリ：052-744-2971

この手引きの著作権は放棄されていません。商用目的以外のためであれば
本書のいかなる部分についても許可なく引用、複写、翻訳することができます。

